

赤平収容所（函館第2分所） （ロバート・バートン・ヒアさんが収容）

45.6.7、空知郡赤平町（現・赤平市）に開設。45.3 に台湾から移送されてきた第2派遣所と函館本所の捕虜 140 人が収容。

45.6.26、芦別の第1分所から英軍の F.J.マレー軍医少佐、美唄本所から米・英医療将校が移送。

45.7、上海からの米捕虜 140 人が収容。

45.8.15、終戦。

45.8.28、米軍機が救援物資を投下。ドラム缶が捕虜収容棟に激突して建物の一部が壊れるが、捕虜の死傷者はなし。だが、数個が朝鮮人宿舎を直撃し、日本人炊事婦 2 人が即死、朝鮮人 9 人が重軽傷。

45.9.6、捕虜たちが帰国の途に着く？

※終戦時収容人員 281 人（英 167、米 114）。

45.9.12、千歳飛行場でサター少佐に引き渡し。

※千歳飛行場での事故で米捕虜 2 人が死亡。

●収容所は、国鉄根室本線赤平駅から南東に約 2.5 ㎞、炭鉱住宅街の東端のはずれにあった。近くに朝鮮人独身寮が並んでいた。戦後の 1947 年、収容所跡地に住友赤平中学校が建設されたが、その後閉鎖され、現在は原野と化している。

●分所長は天童二郎大尉。常駐職員 9 人。日本人軍医はおらず。函館本所長は 45.5 より細井大佐。

●前任将校は W.F.フランシス大佐（英）。医療はマレー軍医少佐など米英の医療将校が担った。

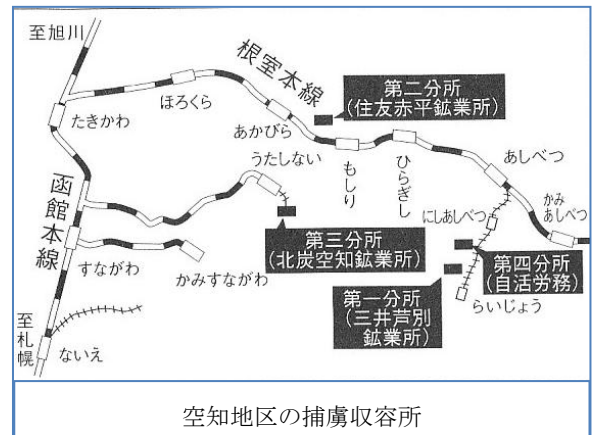
●上海から来た米捕虜の大半はウェーク島で捕虜となり上海に送られた海兵隊員だが、一部は北京や天津など中国国内で捕虜になった海兵隊員も。

●捕虜たちは収容所から約 1.6 ㎞の住友赤平炭鉱で使役された。ヒア氏の手記によると、長年閉鎖されていたと思える古い 2 つの縦坑で、彼らは石炭の掘削や運搬の作業に従事した。岩石が崩れ落ちたり、腐食した梁が落下して負傷する者も多かったが、死亡事故には至らなかった。

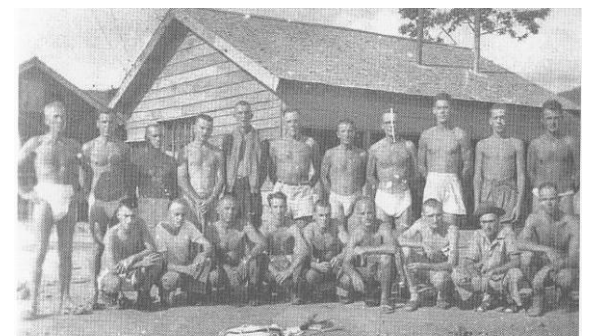
●捕虜取扱は江本本所長時代に比べると後退。食料は質量ともに低下し、赤十字救恤品は日本人が管理して捕虜にはなかなか支給されず、コミュニケーションの行き違いによる暴力行為も多かった。

●収容期間中の死者はいなかったが、終戦後、千歳飛行場での事故で米捕虜 2 人が死亡した。

（文責：笹本妙子）



終戦直後の赤平収容所



赤平収容所の米軍捕虜（終戦直後）